「大学計画委員会」委員長に就任して

文学部古代中世国文学講座 ❖ 位藤邦生

「大学計画委員会」の発足

このたび私が委員長を拝命した「大学計画委員会」について、はじめに、その成立までの概略を述べておきたい。

平成六年四月二十六日の部局長連絡会議で、「広島大学大学計画委員会について」と題する案件が了承された。

そこには本委員会の〔必要性〕が次のように記されていた。

一、大学の理念・目標・将来計画等大学全体に係わる問題を検討する常置の機関がない。大学の運営は従来学部単位で行われてきたが、大学改革を推進するためには、絶えず中・長期的観点に立って、大学全体の立場で将来計画等を企画・立案する機関が必要である。

二、国際的状況や国内の動きに関する情報収集を行い、それを分析し、大学運営に反映させることを検討する機関が必要である。

三、評議会の機能は主として審議・決定にある。これに対して、企画・立案を行い、学長に提言する機関が必要である。

右の趣旨に基づいて、翌五月二十四日に「広島大学大学計画委員会規程」が定められ、同日から施行されることになった。以下に第一条と第二条とを記し、その他の条文については、要点のみを記すことにしたい。

第一条　広島大学（以下「本学」という。）に、本学の大学改革を推進するため、広島大学大学計画委員会（以下「委員会」という。）を置く。

第二条　委員会は、学長の諮問に応じ、全学的視点から中期的・長期的観点に立って、次の各号に掲げる事項について検討する。

(1) 本学の理念・目標に関すること。
(2) 本学の将来計画に関すること。
(3) 本学の組織・運営に関すること。
(4) 本学の自己点検・評価委員会等からの改革・改善提案に関すること。
(5) その他本学の大学改革に関すること。

第三条の委員会の組織については「学長が必要と認めた若干名の委員で組織する。」となっており、八名の委員が任命された。「委員の任期は、二年とし、再任を妨げない。」ことも決められた。

自己点検・評価と大学計画委員会

平成元年四月、本学では、将来構想検討委員会の答申「二十一世紀に向けての広島大学のあり方」が出され、その中で、自己改革を自律的に実現する手段として、自己評価及び自己改革機能をもつ管理運営体制が提言された。

さらに平成三年、大学設置基準等が大綱化されたのを契機として、全国の各大学で自己点検・評価の動きが活発となり、本学でも、全学的な規模で検討が行われた結果、「広島大学自己点検・評価委員会」の編集による『広島大学白書[1]　新しい大学像をめざして―専門深化と総合化―』が刊行（平成五年五月）されるに至った。

この白書の「Ⅰ広島大学の理念とあゆみ」「1理念・目標及び将来構想」の結びに、次のように書かれている。

「学問は常に進展し、変貌し続けている。大学を取り巻く環境も急速に変化している。このような状況下で、絶えず将来を展望するためのアンテナを張り巡らし、情報の組織的収集を行うことが、本学の自律的改革への道を切り開く第一歩である。このような情報をもとに、時代を先取りした将来構想を継続的に検討し、それにもとづく計画的整備を企画・立案し、評議会等において十分時間をかけて審議・決定し、改革を実行に移し、その結果を点検・評価して将来構想の見直しに活かす、という慣行を育むことが、本学の今後の一層の発展に向けて強く望まれるところであろう。そのために、学長のもとに調査・企画・立案を行う半恒久的な組織（たとえば、学長補佐室など）を設けることも検討すべきである」。

今回発足した「大学計画委員会」は、従って、右の提案が実行に移されたものだとも言えよう。

「大学計画委員会」の役割

昭和二十四年に創設された広島大学は、これまで、先人の努力によって、幾多の試練を乗り越えてきた。森戸辰男初代学長が示された建学の理念を活かし、新しい時代の要求に沿った大学へと絶えず変貌をとげて行くために、歴代学長のリーダーシップのもとに、「大学問題検討委員会準備委員会」、「大学改革委員会」、「将来構想検討委員会」等、それぞれの時代、それぞれの道程が要求した諸委員会が、広島大学の将来構想に向けて、積極的な提言を重ねてきた。ただし、大学という組織体が持つ根本的な性格や、我々自身の怠慢のために、提言された事柄の実行が、後手後手にまわっていたという印象は免れない。

このたび、原田康夫学長の諮問機関として発足した「大学計画委員会」は、広島大学の将来構想のために、深く考え、機敏に行動する委員会でありたいと念じている。広島大学を今後どのような大学に育ててゆけばよいのか。海図のない航海にも似た、現代の混沌とした状況の中で、我々に与えられた課題は途方もなく重い。

多くのかたがたのご意見を聞きながら進んで行きたいが、我々の仕事は同時に、広島大学の将来に向かって、夢を紡ぐ仕事であるとも思っている。深いご理解とご支援をお願いする所以である。

（いとう・くにお）